

シュスターマンにおける二つの美的経験
——「特別な美的経験」と「平凡な美的経験」の意味するもの

李惠珍（東京大学）

本発表では、アメリカの哲学者リチャード・シュスターマンの「美的経験」の概念を分析する。そしてこの分析を通じて、シュスターマンの「美的経験」概念が芸術制作の過程や日常生活の美学を論じる上でもつ有効性を明らかにすることを旨とする。

「経験こそが芸術である」と主張したデューイの美学を継承するシュスターマンの美学にとって、美的経験をいかに規定するかという問題は、基本的かつ重要な問題である。2011年に発表された論文“Aesthetics as Philosophy of Art and Life”において、シュスターマンは美的経験に関し、新たに「特別な美的経験」と「平凡な美的経験」という二つの区分を提示した。平凡な美的経験なのか特別な美的経験なのかは、経験主体の身体が持つ感覚の質や強度によって決定される。前者は、「安楽さ」や「慣れた気分」という特徴を有するのに対し、後者は、「意識の注目」「異化」「改善」「変容」という特徴を有する。

では、この二つの区分は、シュスターマンの美学全体にとって、また美的経験をめぐる近年の分析美学での諸議論にとってどのような意義をもつのであろうか。本発表では、従来のシュスターマン美学、たとえば“The End of Aesthetic Experience”（1997年）と上掲の論文（2011年）とを比較することによって、新たな経験区分が彼の美学の「非エリート主義化」と「身体的立場の先鋭化」および「美的経験の非対象依存性」をもたらしていることを明らかにする。

シュスターマンは1997年の上掲論文で、美的経験一般が芸術作品の鑑賞経験のように、「価値評価的」「現象学的」「意味論的」「画定的-規定的」な次元を持っていると主張した。これに対し、たとえばA. Nehamasは、このような特徴によって定義されるシュスターマンの美的経験概念は、「[芸術家ではない]一般大衆は美的経験ができない」という帰結を生む、つまりエリート主義的な性格を有していると批判した（1998年）。だが2011年の論文でシュスターマンは、特別な芸術性を持たない平凡な美的経験の概念を追加することによってこのような批判を乗り越えようとする。またシュスターマンは新たな経験区分を導入するにあたり、身体感覚知覚（somatic sensory perception）が直接に美的経験に関わることを強調している。ここには見られるのは、芸術作品の経験であっても、そこで生じる快は（信念を媒介とすることなしに）身体的に引き起こされるという考え方である。さらに、シュスターマンは、美的経験を身体感覚知覚にもとづいて区分することにより、特別な美的経験をもたらした対象が平凡な美的経験をもたらすようになること、逆に平凡な美的経験をもたらしていた対象が特別な美的経験をもたらすようになることを説明するための概念枠組みを獲得したと考えられる。